新山協ニュース

発行者　鈴木敏雄　発行所　新潟県山岳協会

〒940　長岡市学校町1－12－23　室賀輝男方　TEL 0258－32－0428

吉野さんの逝去を悼んで

デラシネ山の会　高橋秀樹

10月5日朝、出勤前のあわただしい中、突然の電話のベルに受話器を取ってみると、吉野さんの訃報でした。発病以来、容態が思わしくないとは聞いていましたが、それにしても、あまりに早すぎた知らせでした。折しも国体の大詰めの時、頭の中がこんがらがって遺族の方の話も、うわの空で聞いた様に思います。

デラシネ発足以来十余年。公私共々、一方ならぬお世話になってきた吉野さんです。酒が大好き、話が大好きだった吉野さんでした。二人で焚火を前に酒を汲みかわし、語り明かした山の夜。空が白みかける頃、私がアクビをすると自分もアクビをして、「寝るかね。」なんて、にが笑いをしていた時もありました。

5年前、初めて国体に参加して以来。卓越した行動力で、着実に新潟県チームを育ててこられました。又、県内のトップクライマー達とも多くの接触を持ち、技術の向上、スタッフの育成も忘れませんでした。選手層の薄い当県にあって、少しでも情報が入れば、上越、高田、あるいは下越にと、選手の説得に回っておられました。

今年は又、北信越国体が当県で開催されました。国体委員長として、その御苦労は大変なものだったと思います。お宅にうかがうと、沢山の書類に囲まれて、いつでも書き物をしておられました。私の顔を見ると、丁度一休みの様に、お茶を出してくれ、「これはどうしょうかね。」「これでいいかね。」と、色んな事を相談して下さいます。やはり1人では不安も多かったのでしょう。何んの力にもなれなかった自分が、今では悔やまれてなりません。

しかし北信越国体は立派にやりとげられました。反省会の席上「皆様どうも有りがとうございました。」と言葉少なに深々と頭を下げられる吉野さんは、大役を終えた心よりの安堵の姿でした。

吉野さん。今年の京都国体で、あなたの育てた成年女子チームが、登攀競技で見事6位に入賞しました。ここに賞状を掲げ、御冥福を心よりお祈りします。

合掌

藤島先生を偲んで

古い思い出

下越山岳会　五十嵐篤雄

先輩から見せてもらった新潟鉄工所部報「登山とスキー」第8号、飯豊連峰特輯号がどうしても欲しく、綴じ目書き、ガキを同封し照会した。すぐにでていた藤島玄さん宛に残部少々あり、欲しいなら代金は郵便切手でよい。君は新発田なら諏訪前の石屋、佐久間淳一君を訪ねてみるがよい。飯豊に詳しい人だ。私は杁差岳の大熊沢も遡行したという内容の返事がきた。昭和20年の暮のことであった。

昭和22年、佐久間淳一さんの紹介で越後支部の会員になる。その年の5月に高体連登山部の登山講習会が二王子岳でおこなわれた。講師は藤島玄先生である。長身で坊主刈、鼻髭をたてサージの黒ズボンの裾をノルウェーバンドで締め、軍足（旧軍人が履いた靴下）にワラジ履き、精悍な顔つきはまさに飯豊の主にふさわしい風貌で「君が五十嵐君か」と問われたのが初対面である。藤島玄さんが42才、佐久間淳一さんが33才、私が21才であった。

昭和23年6月13日、越後支部の総会は、小出町の伊倉剛三さんの御世話で八海山の千本桧小屋でおこなわれた。翌14日、本部は中ノ岳小屋に泊り、15日、生姜畑、十字峡経由で六日町に出ることになっ

ていた。

朝から雲行がわるい、五竜岳ではガスが濃く、藤島さんが「どうしたもんだ、お前等行ってみるか。」と先兵の井本巌、林孝司、小泉喜重と私に問うた。林の「玄さん行きましょうだい。」のひと声で決り歩きだす。

オカメノゾキのあたりから雨になった。御月山を下ったあたりだと思うが、ガスの中・の雪渓を通り抜けたが、どうしても道にのらない。雨は土砂降り、「道のないのは当り前だ、雪の続いているところを登れ、雪が切れたら藪を直登だ。」藤島さんの指示がとぶ、先兵の私達は広く長いと思われる雪渓を登りつめ、死にもの狂いで直登の藪こぎを続け漸く藪から抜けたところが中ノ岳小屋の傍であった。私達のうしろで指示をしていた藤島さんはすでに藪際に立ってニヤニヤしていたのである。人の姿は見えないが藪がモクモクと動いている。それを見て藤島さんが「五十嵐見ろ、これは井本だ。」「これは小泉だ。」という。間違いなく、井本が顔を出し、次に小泉だった。私達の藪こぎの個性まで見抜かれていたのである。

総勢23名、流石は越後の岳人、ずぶ濡れで、それぞれにルートを選び間違いなく日暮前に全員小屋に集結した。

定員15名位の避難小屋に23名が押し詰めたのだから、横になって寝る訳にゆかない、外はときどき思い出したように雨が降っていた。

今朝も雨だ、生姜畑から十字峡の道は廃道同様である。踏み跡をはずすと、探すに容易でない。根曲竹藪に入ると踏み跡は全くなくなる、オーダーは変らない、下手するとうしろから藤島さんの大声がとんでくる。

前線が通過したのだろう、ときどき日が射すようになってきた。十字峡に抜けたころは、すっかり天気があがり、乾いた川原石に濡れものを干したりの休憩。財布の中まで濡れたのであろう、紙幣まで石に張り付けて干している者もいた。

そろそろ出掛けよう。時計を見たら午後2時近い。今日中に帰宅するには六日町駅午後4時10何分かの汽車しかない。伊倉さんが「十字峡から2時間では行けない、あきらめた方がいいよ。」といったら、藤島さんは「俺についてくれば間に合わせて見せる。」といった。私達が大急ぎで乾物をリックに詰めているうちに藤島さんは歩きだした。

当時は山靴など履いている者は誰もいない。それでも軍靴（旧陸軍兵隊の靴）、地下足袋を履いていた者が何人かいたようだが殆んどの人は裸足にワラジである。勿論藤島さんも私達も。

歩き始めは10人位はいたようだった。1時間も歩き続けると、1人2人と落ちてゆく、大股にリズムをつけて歩いてゆく藤島さんの歩巾に合せてついて行くのだが、どうしても遅れる。又小走りに藤島さんの後にピタッとついて行く。あの話し好きな藤島さんが、一言も喋らない。汚ない話だが林の歩き方がおかしい。よく見ると小便をしながら歩いている。「バッカだなあ。」といったら、「する暇がねえねっか。」小泉は、あきらめたのか遅れはじめ、やがて追いつけない距離になった。

振りむいたら後に誰れもいない。つまり藤島さんについて歩んでいる者の中に私がビリという訳。何度かあきらめようと思ったが、井本、林に負けたくない執念で歩き続けた。

足を棒にして六日町駅に辿り着いた時は、井本、林、私の他に誰れだったか覚えていないが2人程いたようだった。

切符を買いアイスキャンデー1本かじり終らないうちに下り列車がプラットホームに入ってきた。

藤島さん曰く「ついてくるのはお前達位のもんだと思っていたよ。」と。これから藤島さんと親子のような、長い付き合いが始まることになる。

合　掌

藤島先生を偲んで
最後にお会いしたときのこと

悠峰山の会　藤　井　洋

私が藤島先生に最後にお会いしたのは、昭和60年4月のことでした。そのとき先生は、私が勤務している新潟市役所の受付へおいでになり、私を呼び出されました。行ってみると、奥様もご一緒で、ご自宅の土地のことで少しトラブルがあることを話されました。私は、早速その問題の担当課である8階の建築指導課へ、ご夫妻を案内しました。先生は、私の肩に手を置いてゆっくりと歩かれ、エレベーターの中でも、手はそのままにしておられました。

建築指導課の担当者には、奥様の方が多く用件を話されましたが、担当者が後日の調査と解決を約束すると、先生はほほ笑んで私の労をねぎらってくれました。

再び玄関に戻ると、奥様は私の手助けを謝絶されて、先

生をタクシーまで連れて行かれました。それも、なるべく手を貸さずに、先生おひとりで歩くようにされながら。私は、先生が何とか早く元の身体に戻られることを願う、奥様の心遣いを垣間見る思いがいたしました。

その後、ご子息の嶺樹氏が見えられて、わざわざお礼を申されましたが、私は、先生ほどのお方で、しかも人情味こまやかなはずの下町にあって、やはり世事のトラブルに巻きこまれることもあるんだなと思うと同時に、何がしか先生のお役に立てたのかと思うと、少し安堵いたしたものです。

その年の6月には、JAC越後支部の80周年記念会が長岡で開催されました。しかしそこでは、西堀栄三郎氏、茅原一也教授、片岡博氏、斎藤平七氏（故人！）らと一緒におられるはずの、先生のお顔を見ることはできませんでした。

私は、先生の訃報を聞いたとき、まっさきにこの先生との最後の出合いを思い起こしました。その後は、何か恐れ多くて直接のお見舞いをしなかったことが悔やまれるのですが、私にくっきりと残っている、先生がまだ少しお元気だった頃のお姿は、終生の思い出として残ることとなりました。私は、先生についての多くの記憶の中にあっても、特にこの最後の出合いを大切にしなければ、と思っています。

合掌

理事会報告

日時　昭和63年10月8日(土)
　　午後3時より
場所　長岡市　けさじろ荘
出席者　室賀会長、望月副会長、小林副会長、五十嵐参与、杉原参与、鈴木理事長、石田、桑原、藤井洋、藤井信各常務理事、山田智子、五十嵐昇各理事、森、堀井各委員

議題
1.後期行事について
2.自然保護副委員長の選出について
3.京都国体の対応について
4.昭和64年国体県予選会会場について
5.カンパ、寄附報告
　国体、県スポーツ振興基金、県体育協会賛助会員
6.分担金入金状況について
7.支出状況報告
8.協会規約について
9.行事案内

等について審議された。

岩登技術講習会
47名参加

6月26日、新発田市の杉滝岩で行なった。今年も前年にひきつづき、結び方、用具、登り方、懸垂下降、確保、登攀、脱出、タイヤ落し、の8項目についてみっちり実技研修した。

なかでも長岡工業高等専門学校の10名の生徒は、熱心に受講し注目された。当日の講師および助手の方は、安野、阿部、吉野、小林、橋本、小島、高橋秀、渡辺敏、五十嵐の9名の方々で、その尽力に対してお礼申しあげる。

（技術委員長　平田大六）

国体選手団へのカンパ報告

ニュース45号で標記の件お願いしたところ、左記の通りカンパいただきました。

笹神村うすゆき山の会　2口　100000円
デラシネ山の会
悠峰山の会
新潟鉄工山の会
長岡ハイキングクラブ

以上1口、50000円

京都国体陣中見舞いでお届けしました。

賛助会について

当協会事業の充実と円滑な運営を図るため、昭和61年度評議員会の賛同を得て賛助会員制度を設けましたところ、諸先輩はじめ多くの会員のご理解とご協力をいただき、緊迫した財政をいくたびか乗り越え事業の運営を図ることができました。

オープン参加から得点種目に移行しての国体登山競技は、他の種目と異なり現地の競技場（登攀、踏査、縦走）をマスターすることが重要なポイントになっております。

第43回京都国体では、成年男女、少年男女、4種別の出場が決り、選手監督総勢20名が、幾度も現地視察をおこなった甲斐があって好成績を挙げることができました。

選手強化合宿費については、県体協から補助は全くなく、県山協、賛助会、会員の喜捨、その他は本人負担ということでなんとか賄うことができました。

国体のみならず諸事情ご賢察の上、賛助会についてご理解とご協力を賜りますようお願いする次第です。

会費年額1万円、納期は、その年度内、払込方法、
第四銀行新発田支店　普通
預金口座1239508
新潟県山岳協会　賛助会代表　五十嵐篤雄宛

昭和63年度　会員氏名
小野健、上村幹雄、土田幸雄、望月力、石田国夫、室賀輝男、杉本敏、故斎藤平七、五十嵐

篤雄、五十嵐昇、杉原八百樹、内藤修、平田大六、藤井洋、遠藤家之進正和、今成幸夫、早津邦俊、濁川浩、桑原悌一郎、筑木力、藤井信、佐藤一栄、鈴木敏雄（敬略順序不同）

昭和63年10月23日現在。

今後、賛助会員には、毎月「新山協ニュース」をお送りすることにいたしました。

（文責　五十嵐篤雄）

昭和63年度日山協救急指導員講習会
新潟県山岳協会遭難救助講習会併催　案内

日山協の要請で、昭和63年度救急指導員講習会（関東北信越地区）を、県山協が主管で行なうことになったので、当協会恒例の遭難救助講習会と併催することにしました。

最近の救助用具、指導者の法的責任問題等、有意義な講習会です。多勢で気軽に参加して下さい。

◎実施要項

会場　新発田市五十公野（イジミノ）升潟、新発田市青年の家。

日時　11月26日12時開講、27日14時、閉講。

会費　6000円（宿泊、懇親会　含む）

o第1日目　講義、他

・日山協共済と保険

・救助活動と身分保証

・指導者と法的責任

・中高年登山者と遭難

・各県の遭難と救助活動実熊

o第2日目

・最近の救助用具についての解説

野外会場（杉滝岩）に移動

・搬出作業の実技

・急造担架の作製等

午後は講習会のまとめ閉講。

申込　11月20日まで、郵便ハガキにて、住所、氏名、年令、所属団体名を明記の上、県山協事務局宛に申込むこと。

（遭難対策委員長　五十嵐篤雄）

山と書物②
「登山の文化史」桑原武夫 著

本書は第二次大戦下の昭和27年6月、大阪で行なわれた講演をもとにまとめられたエッセイで、短かいものであるが人間の登山行為というものを考える上では見逃すことのできない貴重な文献である。

「登山とは文化的行為である。文明人のみのなす行為なのである。」という大テーゼから論は展開する。要するに文化のないところには登山はないということであるが、逆に交化のあるところ必ず登山があるかというとそうでもない。「古代エジプト、インド、ペルシャなどは文化は発達しておったが、登山は一向に発達していない。だから文化には色々あるが、それぞれの文化によって山に対する態度が相違し、登山が発生したりしなかったりする、ということになるのである。」

そこで著者は、世界各国の文化と登山の関係を祖述する。

まず古代・中世のヨーロッパ人は山に登る何らの理由をもたなかったし、また中世には山が神秘化され、山が悪霊の棲家となったとし、登山行為が行なわれるためにはそれらを打破する新しい思想が生まれなければならなかったとする。

中国では山を不老不死の神仙の住むところとする山岳崇拝や神遷説から、山に対する芸術的親近性はあったが、逆に自然との対立意識がなく、そのため宗教的、芸術的、静観的なものにとどまり、逆にアルピニズム発生の地盤とはなり得なかったとする。

著者によれば近代アルピニズムの特色は、近代科学精神と結びつき、かつ非宗教的だという2つの点にある。そしてそのことから近代アルピニズムは近代ヨーロッパにおいて始めて発生したと結論づけられる。ヨーロッパではルネサンス以後、宗教改革の力によって合理主義が浸透し、山も神秘的要素から解放されて物質のかたまりとなった。また勃興してきた近代自然科学を背景に科学者達はアルプスの峰々に果敢に探険を企てて行った。また自然主義やロマン主義思潮の影響から都会生活から隔たった自然そのものへの回帰が讃美されるようになった、等々。

しかしそれらを支えたのは実は近代市民社会の形成であったのである。登山の流行を支えたのは市民社会の発達であり、自由な活動を享受することの出来るブルジョワジーの出現が文明の発達とともに登山文化を前進させたとする。

以上自然と人間のかかわりからみたアルピニズム発生史論であり、登山というものを考える上で刺激的な多くの要素をもっている好エッセイであるが、残念ながら素描にとどまっている。本書以降、本書の論をさらに詳説、発展させた登山文化論は今のところ出現していない。

現代の爛熟した登山状況を理解するためにも、木目の細かい文化論としての登山論の展開が期待されるところである。

（悠峰山の会　田中純夫）